報告資料

第1回
認知症になっても安心して暮らせる町づくり
１００人会議

■2005 年 7 月 8 日(金)　　霞が関東京會舘■

2005 年 7 月

認知症になっても安心して暮らせる町づくり１００人会議　事務局

議事次第

◆第1部　100人会議

1. 開会
2. 100人会議の経緯及び趣旨、役割について
3. 100人会議の規約について
4. 100人会議の議長選出について
5. 認知症への名称変更と今後の認知症対策について
6. 講演「認知症とは？」
7. 認知症サポーター100万人キャラバンについて
   認知症講座デモンストレーション（協力：近江八幡市）
8. キャンペーングッズ等の紹介
9. 100人会議の会員紹介等
10. 100人会議宣言
11. 閉会

◆第2部　キャンペーン　キック・オフ　イベント

1. ＜地域活動報告①＞
   「みんなでつくろう！ひとにやさしい川崎のまち」
   （神奈川県川崎市）
2. ＜地域活動報告②＞
   「『もの忘れ散歩のできるまちほんべつ』をめざして」
   （北海道本別町）
3. ＜地域活動報告③＞
   「いつだって心は生きている～大切なものを見つけよう～」（福岡県大牟田市）

◆第1部　100人会議　(報告抜粋)

挨　拶

厚生労働大臣　尾辻秀久

認知症につきましては、現在でも介護保険の認定を受けられた高齢の方の二人に一人にその症状や影響が見られます。高齢化が急速に進みますわが国におきましては、最優先で対処すべき重要な課題となっております。厚生労働省といたしましても、認知症対策に積極的に取り組むことといたしておりまして、まずこれまでの痴呆という名称を認知症へと改めました。痴呆は法律上の用語でもありましたけれども、先月成立をいたしました介護保険制度改革関連法によりまして法令用語としても認知症に改まったところでございます。

さらにこの４月からは名称変更を契機に、認知症を知る１年と題したキャンペーンをスタートさせました。このキャンペーンの主旨は、認知症についての正確で具体的な情報を国民の皆様に幅広くお届けをし、理解を深めていただきますとともに、認知症の方が暮らしやすい地域づくりを推進していくことにあります。認知症対策に関しましては、各種の施策の充実を今後一層図らなければなりませんけれども、それと並んで住民の方々や住民組織、地元企業などが参加した地域づくりがたいへん重要であると考えております。認知症の高齢者の方が住みなれた地域の中で、暮らし続けますためには徘徊した場合の周囲の対応でありますとか、ちょっとした生活面の支えや見守りを必要とします。また、昨今悪質な住宅リフォーム業者による詐欺事件が社会問題になっておりますけれども、悪質業者を取り締まることと合わせまして、被害に遭いやすい認知症高齢者の世帯を地域の目が守るということが有効な防御策になるのではないかと考えます。

こうした中、堀田先生をはじめとする各界の有識者の方々や、保健医療福祉、地方自治の関係団体、さらには私ども厚生労働省にとりましてはこれまであまりご縁のございませんでした生活関連産業の団体の方々、あるいはまた小、中、高等学校の関係者の方々が参加されて認知症を知る１年の推進母体をお作りいただきまして、啓発や地域づくりの応援団となっていただくことは実にありがたいことでございまして、勇気をいただく思いがいたしております。

皆様と一緒に手を携えて応援団の輪を広げつつ、全国各地が認知症になっても安心して暮らせる町になりますように厚生労働省としても精一杯努めてまいりたいと存じます。

１００人会議の経緯及び趣旨、役割について

民間も、行政も一緒になって１００人会議に参加して認知症の認識を広めよう

１００人会議議長　堀田力

認知症は、認知症の方自身あるいは家族だけの問題ではなく、すべての人にとって人生を最後まで安心して過ごせるかどうかという国民全体の問題で、認知症になっても安心して暮らせる社会を作ることが日本の急務であります。

一昨年の６月に、「2015 年の高齢者介護」という提言をさせていただきました。この中で、認知症の方の尊厳をどのようにして確保するのかという提言をいたしました。尊厳ということでは痴呆という当時の言葉は問題ではないか、ということで昨年「痴呆にかわる用語の検討会」でいろいろと議論しました。名前を変えるだけではなくて認知症の方の状態、そしてその尊厳の確保について認識を共有する必要があり、国民的なキャンペーンの提言もいたしました。

それを受けて厚生労働省では、「認知症を知る１年」というキャンペーンを開始され、それと連動して認知症の方、家族の方が安心して暮らせる町づくりをしていきたいということでこの「１００人会議」を呼びかけたわけであります。まず有識者の方の説得力、影響力を持って認識を広めよう。さらにいろんな団体、民も官も参加して広げよう。そういう主旨で本日発足することになりました。

本年度の主な取り組みといたしましては、認知症サポーター100 万人キャラバンを進めるということが「１００人会議」の主たる目的であります。この会議を今年立ち上げて、その先については、2009 年までに認知症サポーターを 100 万人に広げていきたい。そして 2014 年にはすべての町を認知症になっても安心して暮らせる町にしたい、こういう目的を掲げて官も民も力を合わせてみんなが同じ気持ちになれるように努力してまいりたいと思っております。

認知症への名称変更と今後の認知症対策について

社会全体の力で対応をしていかなければならない

厚生労働省老健局長　中村秀一

要介護認定に該当されている方が 400 万人を超えています。その半数の方に認知症の症状があります。いま、約 2 千 5 百万人の 65 歳以上人口ですが、2015 年には約３千３百万人に達し、後期高齢者の方が１千万人ですが、2025 年には約２千万人になります。これからは認知症高齢者ケアをケアの標準と位置づける必要があります。

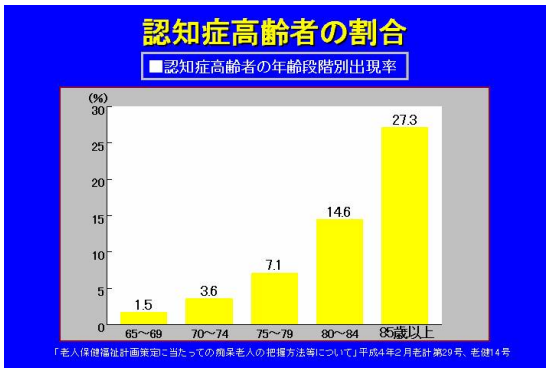
私どもとしてはこのキャンペーンを１年限りのキャンペーンに終わらせず、地域づくりを 2015 年に向けて、精力的に取り組んでいく必要があるのではないかと考えています。

それぞれの認知症の段階に応じたさまざまな課題があります。情報提供、キャンペーン、権利擁護、研究、地域づくり、人材育成などの課題があると思っております。今日、この「１００人会議」を作っていただきましたことは本当に、われわれにとって大きな励ましでございますし単に行政だけではこのような大問題を進めていくことはできません。社会全体の力で対応をしていかなければなりません。これまで難しかった認知症対策についてこれまで以上に精力を注いでいかなければならないと思います。われわれもがんばりますが、ぜひ皆様方のご支援ご協力をお願いします。

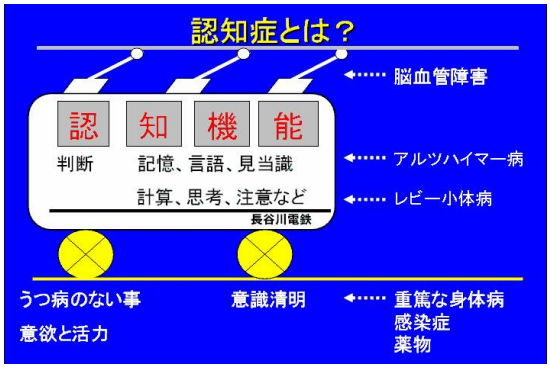
講演 「認知症とは？」

認知症介護研究･研修東京センター長　長谷川和夫

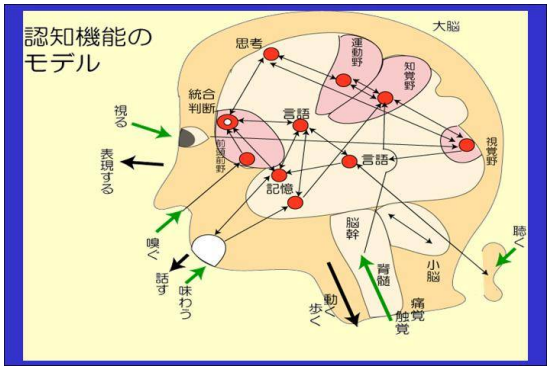
認知症の人は加齢とともに増加し、5 歳区切りで倍々となっていきます。認知症かどうかのポイントは 3 つあります。1つは記憶の低下、2つは認知障害です。言葉のやり取り、場所の見当、手順を踏む作業、お金の計算が難しくなる、ほかに親しい人の顔も認識できないこともあります。そして、3つ目の生活の支障をきたすときに初めて認知症という診断が下ります。今までの暮らしができなくなったとか、周りとトラブルを起こすという条件です。これは年のせいだけでは起こりません。必ず原因疾患があります。



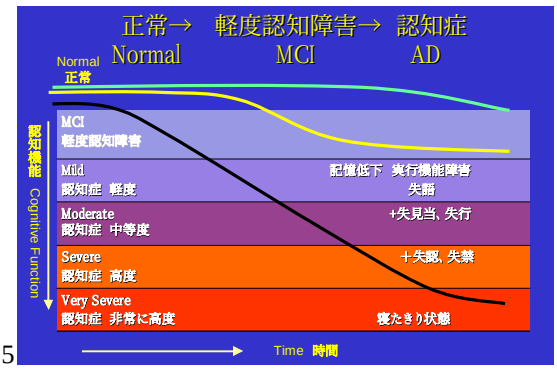
認知機能という電車にたとえてみると、電車が走っていくためには、車輪がきちっとしてないといけません。前の車輪はうつ病がないこと、後輪は意識が清明であることです。うつ病があるときには認知機能が低下することがありますがこれは認知症ではありません。車輪が悪いだけです。電車そのものが壊れるのがアルツハイマー病、レビー小体病などです。架線と電車をつなぐパンタグラフの故障が脳血管障害です。ですから、この病気の予防というのはこれらの病気を予防することだと私は考えております。



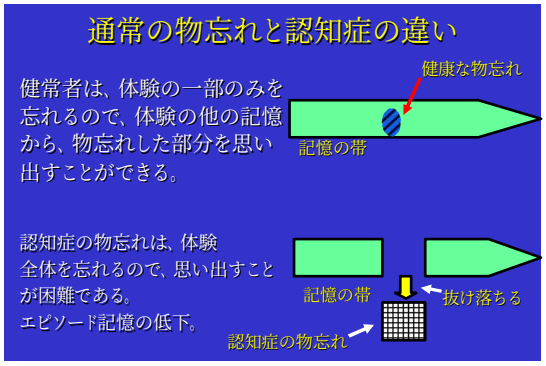
脳は、情報の収集、情報のプロセッシング、情報のコントロールそして情報をアウトプットするといったコンピュータとしての機能を果たします。ここで申し上げたいのは脳のそれぞれの神経細胞の集団、位置です。脳の場所によって働きが違います。たとえば耳から聞いてそれから言語のところに行って、記憶と照らし合わせて「経験ではこうだった」と思って判断をする。前頭前野で判断をして、前頭葉にある言語中枢の指令で話すということになります。

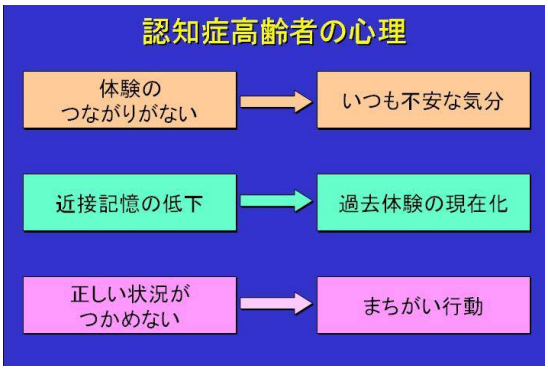


アルツハイマー病の場合はことに段階があって、正常から軽度の認知障害それから認知症になって軽度、中等度、高度となります。正常と

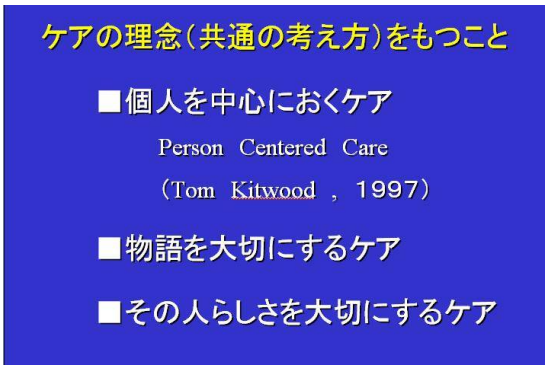


認知症との間に軽度認知障害という状態があると最近言われています。これは物忘れが年齢相応より少しひどくて本人も自覚して、周りからも物忘れがひどいといわれているけれども日常生活には支障がないので認知症ではない。しかしリスクの高い方なのです。こういう方に対して予防対策をしていくというのがひとつの課題です。





普通の物忘れというのは体験の一部を忘れているだけですから過去現在未来という体験と記憶の流れが続いているわけですが、認知症の場合は体験全体を忘れてしまう。たとえば、結婚式に出席したこと全体を忘れてしまうわけです。そのために認知症の人は現在そこにいること自体に不安感を覚えるということになります。 認知症高齢者の心理は体験のつながりがないからいつも不安な気分でいます。だから一番大切なことは認知症の方の不安感をなくしてあげる、「だいじょうぶですよ」ということを言ってあげるとか、声をかけてあげることが大切なことです。それから近接記憶というちょっと前の事を忘れてしまいますが、過去の体験が現在あるかのように押し寄せてくることがあります。そのため混乱するわけです。それから、正しい状況がつかめないため、しかも何とかして生活に適応しなければいけないという努力をするためにかえってそれがうまくいかなくて間違い行動がおこる。たとえば徘徊とか、攻撃的になるとかということが起こってくるわけです。



ですから、ケアの中心理念というのは、こちらの都合でやるケアではなくて、その人の心の世界を理解するケア、そういうことが大切です。一人一人物語を持っているわけです。ことに高齢になると自分自身の物語をいつも自分に言い聞かせながら暮らしていくということが起こるかもしれない。それくらい周りとの情報が絶たれてしまう、そういう世界に入るかもしれないのです。そういうときにその人の物語を大切にするということが尊厳を支えるケアであろうと思われます。その人らしさを大切にするケアということになります。これは決して介護の専門家に求められていることではなくて、できるだけの事をしようという多くの人たちの支えの共通の理念ではないかと思います。

認知症サポーター100 万人キャラバンに向けて
認知症講座デモンストレーション

近江八幡市健康推進課　森村敬子

従来から、自治会単位、老人クラブなどで啓発活動を行ってきました。昨年は10ヶ所の企業と学校でも認知症講座を開催しています。認知症の一般的な知識にプラスして受講者の関心に対応するように留意しています。

対象	受講前の意見	**講座のポイント**	受講後の感想
製造業	・両親が認知症になったらさっぱり予測がつきませんよ ・たぶん介護しなければならないだろうし仕事は続けられない	**・初期対応が天下分け目** **・診断を受けて病態に応じた適切なかかわりを** **・介護サービスの使い方**	・原因疾患がある病気だ ・「かかわり方」が大事だ ・今後の生活の不安が軽減 ・職場開催で参加しやすい
消防署、警察	・徘徊、被害妄想、物取られ妄想などで日常対応が多い。 ・救急対応時、パトロール中に困っている経験がある	**・まず安心できる雰囲気を作る** **・声のトーン抑え目に** **・「どこから来たの」「名前は」と詰問ではなく、話を合わせて**	・救急現場では家族も興奮している。自分たちが正確な知識で対応しなければ ・関係者との連携の必要
金融機関	・「通帳をなくした」、私のお金がなくなったと言う方も ・事務的に対応してトラブルに	**・コミュニケーションのとり方** **・権利擁護、個人情報保護も** **・自分の機関だけでなく連携を**	・事務的な対応を改めよう ・「説得より納得」 ・周囲の対応や環境が大切
学校	・高齢者のことを理解できない ・高齢者は無用な存在だ ・不安定な思春期に祖父母の認知症が受け入れられない ・両親が介護に手いっぱい	**・理解することは、自身を助けることにもなる** **・子ども達のサポート、また人権教育の視点でも先生方が認知症を理解することは重要**	・周りの人の接し方で認知症の人もいろいろできる ・自分たちも考えなければ ・介護の仕事につきたい

(参考) 講座風景

認知症サポーター100 万人キャラバンについて

◆認知症の方々を有形無形にサポートする認知症サポーターを、5 年で 100 万人育成することが目標です。

◆認知症サポーター講座は、認知症の方へのそのとき、その場所に応じた対応の方法や接し方を地域の実情を踏まえて実践へとつなげる講座です。

◆講座を受講した人が「認知症サポーター」となります。

◆認知症サポーター講座は、地域住民と、警察や郵便局、銀行、スーパーマーケットなど日常生活と直接かかわる企業団体への展開も予定しています。

◆認知症サポーター講座を受けた方には共通のブレスレットを贈呈します。

◆腕につけたブレスレットが「認知症の方のためにお手伝いします」というメッセージです。

◆第2部　キャンペーン　キック･オフ　イベント

1．＜地域活動報告①＞「みんなでつくろう！ひとにやさしい川崎のまち」

（神奈川県川崎市/市民団体）

「劇団 SOS（川崎市認知症ネットワーク）」による認知症寸劇上演

たとえ認知症になっても、介護する日々でも、一人の人間として、社会の一員として社会の中で堂々と暮らしていきたい！自分たちから町に出て行こう。孤立している人にはメッセージを伝えよう･･･一人で悩まないで！と。生活の場、地域で理解者を増やしていこう。介護の現場の声の出せない小さな声に向き合っていこう。

わが町で堂々と暮らしたい。それには認知症に対する正しい地域社会の理解、徘徊や介護への地域の見守り、協力が欠かせません。町の中で、地域で、全市的規模でセミナー、講演会、寸劇上演などの啓発活動を展開してきました。今日は全市11団体選りすぐりの名優の迫力ある演技をお楽しみに。

トラブル発生
（本人の気持ちに沿った対応を）

徘徊しても
（おまわりさんが親切に対応）

2．＜地域活動報告②＞

「『もの忘れ散歩のできるまちほんべつ』をめざして」

（北海道本別町/自治体）

■「認知症高齢者を地域で支える仕組みづくり」

平成１１年度から取り組む。行政、医療機関、介護サービス事業者の連携を図り、住民との協働事業を展開しながら推進している。

■「介護劇」

言葉や文章では分かりにくい認知症高齢者のケアを、劇を通して住民に伝えている。平成１２年から実施。観客動員数は約４００人。

介護劇は毎年住民や介護サービス事業者の参加をいただきながら上演しているが、今回（平成１６年度）は、総合的な学習の時間とタイアップし中学生にも参加をいただいたことが新たな試みである。

■「やすらぎ支援事業」

平成１４年度より、地域住民が担い手となって、認知症高齢者の見守りサービスとして実施。

「一万人が家族の地域ケアシステム」

町民や高齢者の参加と連帯による福祉の町づくりの推進を、町長自ら説明。

介護劇
やすらぎ支援事業
の紹介

3．＜地域活動報告③＞

「いつだって心は生きている～大切なものを見つけよう～」

（福岡県大牟田市/市民有志および自治体）

癒しコンサート

（子どもたちとともに作った認知症ケア教室での絵本の朗読と音楽、対談）

★絵本で伝えたいこと

本日朗読いたします「絵本」は、このような活動の一つとして、「認知症の人の理解を広めるためには子供のときから触れることが大切」という実態調査の市民の声やデンマークの絵本にヒントを得て、平成 15 年度事業として認知症ケア研究会が地域の 24 人の子供たちと介護家族、そして認知症の人本人の力を借りて作成したものです。

★絵本を使った啓発活動

現在、市内の小中学校での総合学習や地域の認知症ケア教室などで、絵本を活用した「絵本教室」を展開しています。

絵本「いつだって心は生きている　～大切なものを見つけよう～」のねらい

1)認知症の人の姿や気持ち、豊かな力を正しく伝えたい

2）認知症という病気について正しく伝えたい

3）地域で認知症の人とその家族を支えることの大切さを伝えたい

4）認知症の人の支えを通して、地域全体で誰もが安心して暮らせるために支え合うこと、助け合うことの大切さを伝えたい

5）認知症の人や高齢者への敬いの気持ち、人はみな個人として価値ある尊い存在であることを伝えたい

認知症になっても安心して暮らせる町づくり１００人会議宣言

1　わたしたちは、認知症を自分のこととしてとらえ、学びます。
2　わたしたちは、認知症の人の不安や混乱した気持ちを理解するよう努めます。
3　わたしたちは、認知症の人が自由に町に出かけられるよう、応援します。
4　わたしたちは、認知症の人や家族が笑顔で暮らしていけるよう、いっしょに考えます。
5　わたしたちは、市民や企業人としてできることを行い、安心して暮らせる町づくりをめざします。

情報窓口

各種情報の窓口は、**国際長寿センター　担当：志藤、大上、鹿嶌、渡辺**まで、お願いいたします。

■TEL／FAX：　03-5941-1031／03-5941-1032
■E-mail：　ilcjapan@mba.sphere.ne.jp

100人会議メンバーの方々へ

■事務局や関係団体の動きをお知らせします。

▽100人会議
http://www.ninchisho100.net

▽認知症サポーター100万人キャラバン
http://www.caravanmate.com

▽町づくりキャンペーン
http://www.dcnet.gr.jp/campaign/

▽　だいじょうぶネット
http://www.dai-jobu.net/

▽メルマガ又はFAX通信
（いずれか選択された方法にて）
2ヶ月に1回程度　配信予定

100人会議メンバーの方々から

■各団体や企業等での独自の取り組みがあればお教えください。

■キャラバンの受け入れや、キャンペーンへの協力方法などについてお尋ねがあれば、お寄せください。

第１回「認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」報告資料
2005年7月
認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議　事務局
表紙写真提供：福祉新聞社

禁無断転載